

ウインザー暮らし 四

みずき 啓

交通事情

ロンドン郊外にあるウインザー。北側はたっぷり湾曲したテムズ川が石臼の様に町を押しつぶし、東側の小高くなった所に、女王陛下が週末を過ごすウインザー城が川を睥睨している。城門の足元から街一番の繁華街が、スカートになって広がっている。そのメインストリートを抜けると、テムズ川に架かる立派な橋にでる。橋を渡り、かなり寂しくなったメインストリートの先に、かの有名なイートン校がある。何故をもつて有名なのかは、知らないです。

アパートと大きさもつくりも同じ煉瓦の家々が並び、玄関前には家人それぞれの趣向がうかがえる四角い小さな庭。人も車も少ない通り。薄日の射すウインザーは、盛りの過ぎた白薔薇のように生気がなかった。閑静とか落ち着いていると評することもできるけど、なんだか、精の底が抜けている感じだった。

翌朝、夫は会社へ。私は、大英博物館へ。

アパートからウインザー駅へはだらだら坂を十分余。まず、私の怖れる犬の〇〇に神経を尖らせながら歩く。塀の隅や立木にしがみつくとゴミも恠びしい。なにより驚いたのはね、捨てタバコの多さです。家で禁煙を強いられているのか、とにかく、人が少ないからいいけど、男も女も吸いながら歩いている。それが皆、根本まで吸っている。タバコはイギリスでは七百円もするから？一か月前に十日間旅した韓国では九〇円位だった。日本でも二百円位、その当時。

朝からゴミの収集ごころうさま。収集車は日本と似たりよつたり。プラ製の鼠色の巨大な屑入が各戸に。収集人はガスボンベのようにカートに屑入を載せて運びだし、中身を収集車に空けては戻す、を繰り返す。秦野ではずっと前に定着していた、分別はしていないかった。夫のアパートではトラック一台分位の巨大な屑入に、ビンから缶から、何でもかんでもお構いなしに、つつこんでいた。ああ私もアブナクつつこまれる危険を感じた。

洒落たインテリアショッブと劇場を過ぎると坂はちよっぴりきつくなる。まだ日本では珍しかった電動車椅子を、その辺りでよく見かけた。白やピンクの、乳母車みたいなのがひらひらと、ころころと走る！椅子

から伸びた棒の先に四角いパラソルが、ひらひら。誰もが手を差し出して守りたくなる、風情いっばい。しかし、乗っているおばあ様達の（甘えず生きる）と書いてある、引き締まった侍の貌には、深く感銘した。駅に近づくとかフェが多くなる。出勤前のひととき、新聞を買い、読みながら軽く朝食を楽しんでいる。路上のテーブルで。

城門前を左に折れるとすぐ「ウインザー&イトン」駅。とりあえず、夫の指示どおり、ターミナル駅パデントンまでの往復切符を窓口申し込む。ところが！私のクソヘタ英語に彼女は素早く反応。

「往復三千円。だけど、九時過ぎれば千五百円でロンドンの地下鉄・バス乗り放題つきがあるわよ」と、天使のお言葉。九時迄、あと十分だった。

ウインザーからスラウまでは、ガラガラの一駅。たった一駅だけの路線。ある日ボンヤリしたら、またウインザーに戻っていた。そんな牧歌的状況は、次のスラウで一変する。

スラウからパデントンまでは三〇分、今度は本格的？な列車に乗る。スラウ駅はホームが三本。モニターで出発ホーム（そのつど変化したりする）を確認。まではいいが、これからが本番。同じホーム、同じ線

路上に行き先の異なる列車が並んでいる、なぞ朝飯前。到着し、やっと乗った込み合う列車に、いきなり、私には意味不明のアナウンスが響く。乗客は、無言のまま、しかし、足音をズリズリと響かせて、一斉に列車を降り、跨線橋を上り下りして別のホームの別の列車へなだれ込む。列車は足の遅い人、ぼんやり者を振り捨て、直ちに発車。いやはや、今にして思えば、よく何回も、怪我もなく、足に麻痺があるこの私がサバイバルしたもんだ。若かったなあ。訳もわからず、無我夢中だったよなあ。

そんな苦労の後、走り出した列車も、ターミナル駅であるパデントンへは、止まり、止まりで到着に難儀した。私はいつも九時頃にウインザーを出ていたの、通勤時間の端っこ、線路の込み合う時間帯に引っ掛かっていたのかもしれない。

パデントンは日本では重厚に平坦に発音するが、ここでは花火のようにパツと強く弾んで、続いてディントンとリズムカルに発音するのは発見だった。

何本もの国鉄が停車し、あるいはターミナルであり、地下鉄のハブになっている、大パデントン駅。

地下鉄（チューブ）の古い路線のホームは、地下浅くにあつて老朽化している。先が見えぬほどの奈落へ

降りて行かなければならない新しい路線は、未来志向の斬新なホームである。

ここでも恒例の、乗客全取っ替えを二度経験した。地下鉄の場合は、同じホームの反対側の電車なので、ちやらいものだった。

夫に、なぜ全トツカエが突発するのか？必須なのか？聞いてみたが、知らなかった。

以前、夫が下車し駅のトイレに入った。用事を済まして出てくると、アレ不思議、ワサワサいた乗客達が消えている。改札を通過すると、駅の外に大きな人溜りができていた。なんでも、爆発物関連で、駅から避難するよう、アナウンスがあったと解った。夫は聞こえなかったのか、理解出来なかったのか、のんびりトイレしてたのだった。

当時のロンドンには、爆発物騒ぎが多発していた。

ちなみに、駅のトイレは三Kにして、かつ有料。入口にバーがある。も一つ驚いたのは、手の乾燥機。洗った手を突っ込まれると、ガーゴ、ガーゴ、傍若無人になつておる。全トイレで。

ハンカチを持つ習慣がないの？

しかし、数年後の日本で、上品に洗練され、もの静かなそれが蔓延することになるとは、知らなかったよ。

チューブは時間帯を問わずなかなか込んでいる。席取りバトルもどこかで見た風景だ。敗者の浮かべる、照れ交じりの苦笑いも、そっくりそのまま日本人。人間というのは、同じ状況に置かれれば同じ行動をするのだ。汎人間論を、チューブに揺られながらでつちあげてしまった。

車内の電光表示は、日本では次〇〇だが、ここでは終着駅〇〇で常に同じテロップが流れる。

ある朝、つり革に拵つていて、揺れた拍子に後ろの男の人の足を踏んでしまった。

「ごめんなさい ごめんなさい」詫びると、うん うんと首を振る。私は思わず、

「でも 私は軽いよ」とジョークした。彼の奥さんが間髪を入れず、プツ ククククと吹き出し、しようがないなあと彼も笑ってくれたが、相手次第では、あぶない、あぶない。危険行為は止めましょう。